

1 2 《羊飼いの巡礼》

ジョルジョーネ作品にみられる共通表現

2019

真鍋友範

結論から先に述べるなら、聖書の物語画である《羊飼いの巡礼》は、叙情詩的物語画である《嵐》・《田園の合奏》と同様の、ジョルジョーネが貴族から発注され聖書物語として描かれた【異時空間合成技法】による【故人の追悼記念画】と推測される。



《羊飼いの巡礼》1504 ジョルジョーネ

ナショナル・ギャラリー ワシントン

~~~~~

まずは、ジョルジョーネの《嵐》・《田園の合奏》と比較しながら3作品（図版1・2・3）をじっくり見ていこう。

3 作品の掲載順は、時代を遡ってジョルジョーネ晩年期の 1509 年から 1504 年の 6 年間となっている。



《田園の合奏》 1509

図版 1



《嵐》 1506-08

図版 2



《羊飼いの巡礼》 1504

図版 3

\* 《田園の合奏》をジョルジョーネ作品ではなく、ティツィアーノ作品と分類したルーブル美術館の現在の判定は、誤りと思われる。

【男たちの顔が、共通して暗く、しかも不明確である理由】は、彼らは皆既に亡くなった人物であることを示すジョルジョーネの特徴的表現様式なのだ。

その理由だが、男たちの顔が不明確に描かれていても、この作品を見る当時の依頼主や関係者には、彼らの生前の顔が明確に記憶されている為、受取る依頼者側にはこの描き方で問題は無かったと考えられる為だ。

しかも、時代は写真が存在しない 16 世紀のルネサンス期だった。

参考になる故人の顔写真の代わりになるような正確な故人のデッサンが存在しない場合、仮にジョルジョーネが故人の顔を知らないままでその顔部分を明確に描いたなら、かえって当事者に違和感が残る結果となったのは明らかだ。

誰もが気付くのは共通した叙情的風景画風の要素であるが、3 点の作品には更なる共通項がある。

それは、【暗くて不明確に描かれる登場人物の男の顔に対し、表現上スッキリと連続しない男たちの体幹部や四肢の表現】だ。

【男の体幹部や四肢には、屋外の強い太陽の光が注がれているのに、彼らの顔には共通してほとんど光が当たらないのは不思議だ】。

一方で、《嵐》がジョルジョーネ作品である事は明確だ。《嵐》が示す内容は、【異時空間合成技法】で表現された【家族愛における愛と不安の心理を描いた叙情詩的物語画】であり、しかもこの絵画が画面の男の親族か一族により注文された【追悼記念画】である。(ネット論文《ラ・テンペスタには何が描かれているか・2018》参照)

《嵐》の中の左側の男は、既に亡くなった人物であることを示す意味で、右側のヴィーナスのような明確な顔の表情ではなく、【暗くて不明確な表情】だ。

これはジョルジョーネの他作品《田園の合奏》や《羊飼いの礼拝》にも見られる表現上の共通項なのだ。つまり、《田園の合奏》・《羊飼いの巡礼》もまたジョルジョーネ作品なのだ。

《羊飼いの巡礼》で描かれた内容は、宗教画としての場面であるが、中央に描かれた羊飼いの人物こそ、この絵画を注文した依頼人にとって重要な被描画対象人物であり、依頼人である貴族にとって追悼対象となった人物なのだ。

題材からは、描かれた人物が熱心なカトリック信者であったと推測される。

つまり、【この作品はイエスと聖母マリアに祈りを捧げる宗教画としての作品であると同時に、依頼人あるいはその周囲の人が、亡くなった人物を羊飼いの姿の故人として偲ぶことを目的としている】のだ。

当時の貴族が画家に絵を依頼する場合、描画内容は、肖像画・宗教画・神話や哲学に基づいた寓話などと限定されていた。風景画は決して注文されない時代なのだ。

更に、貴族が家族史の節目での聖堂への寄進や結婚のプレゼント目的や、家族あるいは親族一族の追悼記念画が画家に注文されていたという時代背景を考慮するなら、《羊飼いの巡礼》は、その特徴から純粋な宗教画ではなく、宗教画であると同時に絵画内に追悼のメッセージが存在したと類推できるのだ。

その根拠の一つとして、この羊飼いの男は、ほぼ画面の中央に堂々と大きく配置されている。



また、右隣の羊飼いは、黒い顔の羊飼いと同条件で背面からの太陽光があたっているにも関わらず、その顔色は明るく表現されている。この人物の顔だけを、ジョルジョーネが他と違う表現で表した理由はそこにあるのだ。

あらためて3作品を眺めると、共通点は明快なのだ。

長い間その作者が誰なのか不明であった《田園の合奏》や宗教画である《羊飼いの礼拝》も、《嵐》同様の特徴を持つ、この時期のジョルジョーネ作品なのだ。

ルネサンス時代における人生の平均寿命が30歳代程度であったとすれば、比較的若いこの人物が故人であっても決して不思議ではないのだ。

結論として、《羊飼いの巡礼》は【宗教画であると同時に、その本質は中央に描かれた羊飼いの服装をした亡き人物の追悼記念画】であったのだ。

余談だが、赤い衣服の人物を中心人物とし、その横の人物を【緑の衣服の人物】とする配置の描き方は、《田園の合奏》と全く共通の描画スタイルなのだ。



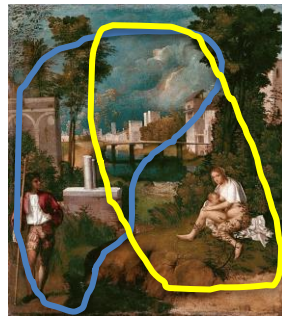
\* イエローの円内の両者の衣服の色に注目

次に前出の3作品に共通する【構図】表現に注目しよう。

ジョルジョーネは意図的に画面を合成表現する画家であった。



《田園の合奏》1509



《嵐》1506-08



《羊飼いの巡礼》1504

\* 3 作品の共通点は、【異時空間の合成表現】だ。

《田園の合奏》では、前景の天上界と背景の地上界の画面合成が見られ、

《嵐》では、異時空間である男の空間と女（ヴィーナス）の空間が、共通する嵐の空で重なるよう画面合成されている。

《羊飼いの礼拝》でも、前景の聖書の物語場面に対して、現実世界である遠景では、風景に点在する人々が極端に小さくて描かれることにより、前景との非連続性を暗示する描き方となっている。つまり、聖書の物語としての場面と、現実の田園風景が意図的に画面合成されているのだ。

これらの証拠から、当時のジョルジョーネは【異時空間を合成する技法】を頻繁に使い、当時としては個性的・先進的な【異時空間の画面合成における開拓者】だったのだ。

結論として、《羊飼いの礼拝》は、《嵐》・《田園の合奏》と同じくジョルジョーネの描いた【異時空間合成技法】による【故人への追悼記念画】なのだ。